

[原著]

児童発達支援事業での子育て支援のあり方と作業療法士の役割 ～自閉症スペクトラム男児を持つ母親1名の語りの分析から～

森 本 誠 司^{1, 2)}

Child care support for mother of the autistic children in Day service center of childhood
and role of the occupational therapist
– Through life story interviews of a mother of autistic child –

Seiji MORIMOTO

- 1) 熊本保健科学大学保健科学部リハビリテーション学科生活機能療法学専攻
- 2) 熊本学園大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学専攻博士後期課程

要旨

児童発達支援事業における療育のあり方、作業療法士の役割を探るため、ASD児の母親1名に対しインタビューを行った。ASD児の母親の語りと筆者の作業療法の実践を重ね合わせるかたちで分析を行った結果、遊びを通じた感覚統合を基本としたアプローチと児童発達支援事業の“ゆるさのある療育”という環境が、ASD児の変化および母親の子育て意識の変化に効果があったと考えられ、療育の効果の要因として確認できた。

キーワード：児童発達支援事業、子育て支援、遊び、作業療法士の役割

1. はじめに

近年、発達障害支援法が定める発達障害児^{注1}もしくは同様の症状を持つ子どもへの対応は大きな課題といえる。熊本市の発達相談機関に、平成26年度に寄せられた子どもの発達に関する相談延件数は、7,474件に上り、内訳は、3から5歳の幼児期の相談が多く、言葉の相談に次ぎ、落ち着きがないなどの行動面の相談が多く寄せられている¹⁾。そのため、就学前の障害がある、もしくは、その疑いがある子どもに対する身近な地域での療育的な支援^{注2}が求められているといえ、その一つに、児童発達支援事業が挙げられる。障害者自立支援法により実施されていた児童デイサービスは、平成24年4月の改定により、名称が児童発達支援事業と変更され、根拠となる法律も児童福祉法へ変更され、通所型の支援事業所に組み込まれた。国は、市町村による一次支援機関として位置付けている²⁾。同様に、通所型の支援

事業所として児童発達支援センターもある。児童発達支援センターは、障害保健福祉圏域における二次支援機関として専門的な支援、地域支援などを役割としている。療育的には、知的障害児通園施設や難聴児通園施設などが制度改定に伴い児童発達支援センターに移行したこともあり、児童発達支援事業より支援内容が濃く設定してあるが特徴といえる。しかし、施設数を比べると圧倒的に児童発達支援事業が多く、身近な地域での支援が受けられるのが特徴といえる。中村³⁾は、児童デイサービス（現児童発達支援事業）について、早期療育を担う施設として紹介しており、発達の支援が必要な児に対する療育の最初の間としても紹介している。身近な地域に位置する児童発達支援事業だが、特に定められたプログラムはなく事業所ごとに療育の仕方に工夫を凝らしているのが現状である。川池⁴⁾は、「早期発見・早期療育」の中で、子どもの特性に対する具体的なアドバイスにより親の育児を支援したり、保育の環

境を整えることによって子どもの「育ち」を援助する取り組みが大切であるとしており、療育における保育の可能性を示唆している。近年、児童発達支援事業にかかわる作業療法士が増えてきているが、児童発達支援事業での役割も、行っている支援内容も各事業所ごとにまちまちである。

田代ら⁵⁾は、児童発達支援事業（当時児童デイサービス）を利用した経験がある自閉症スペクトラム症（以下 ASD）^{注3}がある子ども（以下 A 児）を持つ母親らに対してインタビューを行い、作業療法士の支援について語りを分析し、作業療法士をはじめとする専門家とのかかわりやピアの存在が子どもの障害を受け入れるための支えになっていたこと、また、生活に支障が出るようなこだわりに対し作業療法のニーズがあることを紹介している。そして、児童発達支援事業における早期介入の必要性や段階的、継続的な支援を望んでいることを明らかにしているが、具体的な作業療法の効果については明らかにしていない。同様に、宮脇ら⁶⁾は、児童デイサービスに通っていた ASD がある子どもの 3 名の母親に対し、児童デイサービスでの体験を振り返り、児童デイサービスを利用することで、子どもにも母親にとっても効果があることを紹介しているが、その効果の要因についてまでは検討できてない。

今回、田代らがインタビューを行った母親のうちの 1 名について、療育の中での作業療法士の役割を更に深く探るため、児童発達支援事業を経て児童発達支援センターでの療育を経験している時期に、再度、インタビューを行い、療育に対する思いや体験を聞き語りの分析をおこなった。

本論文では、母親から語られた児童発達支援事業の体験の中での療育に対する思いの変化と、作業療法士として A 児にかかわった筆者らの実践を重ね合わせ、児童発達支援事業における療育の中で、何が A 児と A 児の母親に変化をもたらした要因であったのかを明らかにする。

2. 対象及び方法

- 1) 対象者：母子での利用を行っている B 市立の C 児童発達支援事業での療育経験がある ASD 児を持つ母親 1 名（母親は保育士として勤務した経験がある）
- 2) 調査期間・場所：平成26年 8 月に、熊本保健科

表 1. インタビューガイド

-
- ・児童発達支援事業での療育はお子さんにとって、また、お母様にとって、どのような体験でしたか？
 - ・児童発達支援センターと比べて児童発達支援事業の役割は？
 - ・児童発達支援事業への要望や改善点は？
-

学大学内発達障害学実習室にて実施。（インタビュー時 A 児も同席したが、ボランティア学生と始終遊んでいた。）

- 3) 方法：研究概要を説明し同意、協力を得た。また、許可を得て、IC レコーダーで録音しながらインタビューガイド（表 1）を用いて半構造化インタビューを行った。自然な会話の流れを重視し、1 時間50分でインタビューを終えた。そのデータを文字におこし、母親の児童発達支援事業での体験を通し、子育てに対する思いや、療育に対する思いなどがどのように変化したのかに着目してライフストーリー分析を行った。分析を行う際、随時、ライフストーリー分析に精通した教員にスーパーバイズを受けた。ライフストーリー分析結果の中から、作業療法士の介入が確認できる部分においては、療育記録を引用し分析した。
- 桜井によると、ライフストーリーとは、「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を読み解こうとする質的調査の一つ」⁷⁾とされている。分析のプロセスは、インタビュー後、そのライフストーリーを詳しく調べ、研究のより具体的なテーマとなるべき現象の発見、概念化（命名）、カテゴリー化を行う。収集と分析、解釈が同時並行的に行われる⁸⁾。更に桜井は、「語り手が内部に保持していたものがインタビューによって取り出されるものでなく、語り手とインタビュアーの相互行為を通して構成されるものとし、そして、ライフストーリーは、『共同作品』とか『二重の伝記』と呼ばれることがあるが、インタビューの問いかけや応答がライフストーリーの意味の産出に大きな役割を持つ。」⁷⁾としている。

3. 倫理的配慮

研究を行うにあたり、事前に研究の概要を説明し、研究協力の同意を得たうえで実施した。また、本研

究は、熊本保健科学大学臨床研究倫理審査において承認（臨25-5）を受けている。

4. 結果及び考察

1) 語りの分析及び考察

本文中、母親の語りは、斜体で表す。また、【 】はカテゴリー、 _____ は概念を示す。

母親は保育士をしていた時に多くの子どもを見てきている。そのため、A児が他の子どもと違って、いることに早くから気づき、自閉症を疑い始める。発達相談会を利用し、地区の保健師に子どもの気になる状態を相談する。

《児童発達支援事業に通うまで》

【不安・葛藤】

気づき

「絵本のまねをして『いない、いない、ばあー』とかを言い始めたのが、だいたい1歳2か月だったかな…ようやく言葉が出てきたと思ったらそのあと、タタッと消えてしまい。で、まったく言葉がない状態になったんです…今思えばそれが自閉症の特徴ていうか…」

「こっちが働きかけても反応がうすいな、あと目が合わないなあで、私は結婚前に保育士をしていたので…うすうすおかしいなあって思ってた…」「育てれば育てるほど自閉症っぽいなあって思ってた…もう本を読めば読むほど全部当てはまるんですよね。こだわりがあるとか、目が合いづらいとか言葉が遅いとか…高いところに上ったり、くるくる回るものに興味を示したりとか、偏食がけっこうひどくて…診断がおりてないだけで…」

葛藤

「1歳を過ぎたぐらいから、やっぱり違うなっていうことに気がついてからは、ものすごく悩むし、私もこんな仕事をしてたけどやっぱり受け入れがたいところもあるし、もうちょっとしたらしゃべるんじゃないとか、心の葛藤が一番あった時期が1歳から2歳までかなと思います。もう自閉症って言われてしまえば、それに向かって頑張れたりもするのかもしれないけど、もしかしたら違うかもっていうちょっとした希望があって…」

児童発達支援事業に通う前は、母親自身で色々調べてみても自閉症に当てはまる症状が多くあり自閉

症ではないかと確信する一方、それを否定したいとする二つの思いの間で葛藤を繰り返す、いわゆる心が安定しないゆらぎの時期であった。また、療育をしなければと思っているが、具体的なプランは見えていない状況であった。

保健師に紹介され申請を終え児童発達支援事業に通い始めるが、児童発達支援事業での体験は、子どもを理解し、周りにも支えられ、子育てに前向きになれたとする母親の転機として語られている。

《児童発達支援事業に通う》

【理解者との出会い】

一緒に考えてくれる専門家

「1歳から2歳までが一番きつかったかな、できることも増えないし、言葉も全く理解してくれないし、でも児童デイサービスに通い始めたらそれを聞いてくれる人が増えて…（作業療法士の）〇〇先生とか専門的な方の意見も聞けて…悲しいっていうか、きついけど、どう対処しようかっていうのを一緒に考えてくれる人ができたのが2歳半ごろからですね…だんだん気持ちが楽になってきたかなと思います」

経験・気持ちを共有できるピア

「児童デイサービスとかに通い始めたら、自分と同じ立場のお母さんが増えて…」

「ここに来た時にやっぱり悩みを共有できる人がいるので…お母さん同士こういう悩みがあるとかは共有しやすく、すごくストレスがやわらいだなとは思っていますね」

「お母さんたちから教えてもらったことがすごいあるし、私が知らなかったこともいっぱい知ってる…」

母親にとって、子どもの悩みをわかってもらえる作業療法士やスタッフ、ピアの存在は、かけがえのない存在である。子どもの特性を医学的な視点をつかって解釈する作業療法士の見方や助言は、子どもの障害を現実的なものとして理解していかなければいけない母親にとってきつく感じることもあった。しかし、不安や葛藤が、すべて解消されているわけではないが、子育てのストレスが少なくなり、頑張っている子育てをする力が芽生えてきていると考えられる。

また、子どもの将来を考え、保育や教育環境、療育環境をどのように考えたら良いのか、ピアの持つ情報が役に立っており、その存在が大きく影響して

いた事がわかる。

母親は、A 児の人に対する関心の薄さや感覚面での過敏さがあるがゆえの子育ての困難さを具体的に感じていた。

【子育ての困難性】

人への興味の薄さ

「私以外の人っていうか、私にもそんなに愛着がなかったし、よその人になんて、全く興味がなかったし、なつくこともなかったし…児童デイサービスに行くと、人がいることとか、大人の人に信頼感を持ってみようとか、そういうところから始めたくて行っている」

顕著な感覚の偏り

「困りごととはものすごくありましたね…帽子がかぶれないとか、靴が履きたくないとか、靴下も履きたくないとか…あとは砂がさわれないとかベタベタするものが嫌いで、粘土とかもさわりたくない…音に関しても結構あって、手洗い場にあるジェットタオル、あれが大嫌いで…」

「物事が終わるってということがいやだったり…テレビがもう終わるのがわかったらもう、キーってなってしまったりとか…」

「毎日のことですけどいろんなところから脱走する。児童デイサービスに行っても最初は部屋から脱走、いろんなところを探検して、まあ戻ってこないですね」

「なんせ高いところ、ああいう窓の枠とかにのぼってみたりとか…くるくるするものは今でも…扇風機とかプロペラとかなんかああいうものをこうずーっとみていたりとか」

母親は、保育士の経験があり、保育士として子育ての支援も行っている。しかし、A 児に対しては自分への愛着が薄いなど人への興味示さないこと、反対に、物事にこだわりがあること、触覚、聴覚、味覚などの感覚に敏感さが強くみられたこと、更に、激しい行動に戸惑い、わが子をどのように理解すればいいのか悩んだ姿が頻繁に見られ、子育ての困難さをひしひしと感じていたと考えられる。

これに対し作業療法士は、A 児に対して ASD の特性と感覚統合面から分析と解釈を行った。母親は、作業療法 (OT) の体験を以下のように語っている。

【OT 体験】

人への興味を引き出す

「人に興味がないと、人のことをまねしようって

思わないし、人のことをまねしないと自分のなんか身の回りのこともできない、言葉も多分そうだと思うんですよね…模倣が下手っていうことは、言葉が遅いのも模倣がうまくできないってことなのかなって思って…」

必要な体験

「児童デイサービスですね…OT さん (作業療法士) は是非いっしょに働いて頂ければ。さっきも言ったけど、遊びをとおして動きが…どんな動きだっていうのは OT さん…」

「こういう子じゃなくても不器用な子ってもちろんいると思うし、こういう子だけに有効なわけじゃないんでしょ? きっと」

母親が児童発達支援事業の療育において求めた子どもの変化は、人への興味を示すことであり、障害特性の緩和であった。その当時の作業療法の記録を見ると、活動として、「高い高い」を遊びとして繰り返し行っていた。作業療法士が子どもとの遊びを選択する際、子どもが、どのような感覚刺激に興味を示すのかを分析することから始める。A 児は、激しく体が動くような感覚 (前庭感覚)、力強く圧迫されるような感覚 (固有感覚) を求めている。そのため、シンプルだが A 児の楽しめる感覚が体験できる「高い高い」を遊びとして考えた。この遊びをすると、A 児は、笑顔を見せて喜んだ。「高い高い」を繰り返す中で、A 児は、筆者を見つけると、この遊びを求めるようになった。A 児と筆者の些細なふれあいかもしれないが、人に興味を示さなかった A 児が、自ら筆者に向かって要求する姿は、母親にとって、子どもの成長を実感する体験になったと考えられる。また、A 児に「高い高い」を行う上で、単に要求に応じるだけでなく、「高い高い」をしてもらいたい時には、筆者の目を見て (目を合わせて) ジェスチャーすると要求が伝わることを意識させ、人差し指を一本立てて、いわゆる、手で 1 (イチ) の形を作り (もう 1 回の意味のジェスチャー)、それを筆者に見せると、「高い高い」をしてもらえることなどのコミュニケーション手段として、A 君に教えていった。A 君は、あまり時間を要することなく、これらを獲得していった。

このような活動を通し、A 児に、人と遊ぶ楽しさを育み、ジェスチャーなどを通して自分の意思を伝える手段を学ばせ、好きな遊びを要求できる存在としての他者を認識させることができたのではと推

測する。小西⁹⁾は、これを対象操作機能という考え方をを用いて理論化している。

A 児に対しては、筆者ともう一人女性の作業療法士が支援を行っている。この時期に、女性の作業療法士は、保育室に作り付けられている押入れの上段から飛び降りる遊びを提供した。筆者が行った「高い高い」同様、飛び降りるときの体が激しく動く感覚（前庭感覚）、着地する時に足の裏や足、体を感じる強い圧迫感（固有感覚）が、A 児の遊びの中で楽しいと感じる感覚刺激であったため、この遊びを気に入る、繰り返しおこなっていた。自分の好きな遊びを提供してくれる女性の作業療法士に対しても、A 児は筆者と同じように興味を示していた。

A 児に対するこのような介入方法を、加藤¹⁰⁾は、作業療法の手法一つである感覚統合療法^{注5)}として紹介しており、また、前述したような方法でコミュニケーションの力を育てていく取り組みが、ASD の子どもには効果的であると述べている。

児童発達支援事業において、A 児が作業療法をもとにした遊びを体験し、徐々に変化していく姿をみて、母親は、人への興味が薄い事や感覚的に過敏である事、こだわりが強い事など子育てを困難にしている症状について、作業療法士に緩和するような取り組みを希望するようになる。

【OT の効果】

効果の実感

「児童デイサービスでは、人に対して親しみを持ってくれたっていうことが一番、うん、一番大きかったかなって思います」

「親に愛着を持ってくれた時期が、丁度、児童デイの時期にうわって伸びたので、だいぶ必要とされてる感はこの時期に出たかなと思う。その時期に一緒に通えてよかったと思ってるし、やっぱり一瞬変わったからそういう風になったのかもしれないので、そういうのができてから分離ができたので、それはすごくよかったなと思います」

このように母親が、他者への興味、親への愛着が芽生えたことを、OT の効果の実感として語っている。更に、A 児は、感覚的に敏感な面があり、子育てをしにくい状況があることに對しても、母親は改善を望んでいた。これに對し筆者は、好きな遊びの中に、苦手な感覚体験を少しずつ取り入れるという方法をとった。筆者が行った「高い高い」遊びを

する時には、A 児の脇腹を持たなければならない。本当は、脇腹を持たれるのを嫌がる A 児だが、「高い高い」をするときは持たせてくれた。好きな遊びの中に、苦手とする感覚体験をおりませながら、楽しい遊び（感覚体験）として認識させて行つた。その結果、様々な感覚に對し過敏さを持っていた A 児も過敏さが緩和していった。このような変化を見て、母親は、作業療法の遊びを通した効果が、保育の場においても応用されることを期待するようになる。

【保育への期待】

遊びを通して育ち

「遊びの中で、それこそ保育の話に戻るけど、そういう遊びを取り入れるっていうのもいいのかもしれない。床屋ごっことか病院ごっことか」
「例えば待つことすらも遊びにできないものかと。例えばここで座って待つよとかいう場面多いのでそれを10待てたらいいとかそんな遊びでいいので。待つ遊びとか。耳こちょこちょ遊びとか。耳さわられること慣れておくといいこともいっぱいあるかと」

日々の保育においても、子どもの感覚面の偏りを意識した遊びの組み立ても必要である。保育の中でも、例えば、ごっこ遊びを通して、お友達を意識するとか、順番を待つとか、社会性を育てていくのと同じくらい、子どもの苦手とする感覚を遊びの中に、さりげなく織り込むのも重要であると言える。そして、こうした遊びの中で、A 児の変化を見ることは、母親の子育て意識の変化ももたらしている。

【子育ての喜びと希望】

できることが増える

「言葉もちょっとずつ増えて…まあ大変なことがものすごくあるし、普通の子育てで1教えればいいところを10ぐらい教えなきゃいけないので、普通のお母さんと比べるとちょっと何かを教えるにも工夫が結構いるし、勝手に覚えといでっていうわけにもいけないので、手取り足取り教えなきゃいけないので手間が何重にもかかる。その分なにか一個できるようになると、もうすごく嬉しくって…」

「今までは感覚過敏で帽子がかぶれなかったりとか、靴が履けなかったりっていうのも、それをしないと外に出れないよと教えることによってだんだんできるようになって…今日帽子かぶって外に

出れたよとか…当たり前じゃないっていうようなことも、一個一個が嬉しかった」

A 児が他者に興味話示ようになり、苦手な感覚が減ってくると、課題への拒否が少なくなり、様々な経験ができるようになってくる。経験が積み重なると、子どもの「できた」が、増えてくる。母親も子育ての喜びを実感し、子育てに前向きになっていった。

母親は、A 児のこうした変化を育む児童発達支援事業（当時、児童デイサービス）という環境について以下のように語っている。

【児童発達支援事業への思い】

ゆるさのある療育

「(今、利用中の)療育施設ではないから、やっぱり遊ぶことが中心で、楽しいと思うことからなので、そこから入れたのはすごくよかったのかなと思う…」

「最初からぎちぎちやると、子どもが行きたくないって、楽しくないって思っちゃうので、やっぱり、ゆるさっていうか、いいよって言ってくれないと信頼できないから…ある程度は。それでいいのかなって思う」

「児童デイはそういうところ、それ以降に行くとところは、もうちょっときちっとしなきゃいけないけど、あの人にとっても他の子にとってもそうかもしれないけど、最初はまあ待つっていうスタイルでいいんじゃないのかなと思いますけど…」

「うちの子ができないとか同じくらいできてるとか…やんわり気がつくことはできるかなって。いいか悪いかは分からないけど…なんか見るうちにこの子はここが弱いかなとか、こういうことができるんだとか気づける場所かなと。」

インタビューを実施した当時、就学を見据え、より専門的な療育を受けるため、A 児は、児童発達支援センターに通っていた。母親は、児童発達支援事業での体験を振り返り、子どもが楽しいと思ってくれるような療育が展開されており、療育を受けて良かったと感じている。そして、児童発達支援センターと児童発達支援事業を比較し、児童発達支援事業での療育を「ゆるさのある療育」と表現している。A 児と母親にとっては、遊びを中心として楽しみながら活動に参加できる児童発達支援事業のスタイルが効果的であったといえる。

2) 総合的考察

A 児の母親の語りと筆者の作業療法の実践を重ね合わせかたちで分析を行った結果、遊びを通した感覚統合を基本としたアプローチと児童発達支援事業の“ゆるさのある療育”という環境が、A 児の変化および A 児の母親の子育て意識の変化に効果があったと考えられる。A 児の母親は、療育を開始した時期の子育ての困り感を、感覚の過敏さがある事、人への興味を示さない事と語っていた。当時の記録を元に、A 児が変わるきっかけとなった活動を振り返ると、作業療法士による遊びの影響が大きかったと推測できる。空中に放り投げるような遊び、いわゆる、高い高いを喜ぶ子どもは多い。A 児も、この遊びをととても楽しんでた。物事への関心や興味の偏りがある ASD の子ども達に対し、興味や関心を示す活動から介入することは重要である。A 児の場合は、回るものを見たりすることにも興味を示していた。まだ、人に関心を示さない時期に、回るものを一緒に見て楽しむような活動では、遊びを共有することや、楽しいという感情を共有することは難しい。そのため、子どもと遊びや楽しいという感情を共有するためには、もっと直接的に、子どもが喜ぶような感覚刺激を用いた遊びが必要になる。今回の場合、A 児が喜ぶ感覚刺激とは、かなり強めの前庭感覚や固有感覚であった。このような、子どもの感覚特性に着目した感覚統合の考え方に基づいた分析と介入が、療育の効果を生じさせる要因の一つにあげられると考えられる。

保育においても、このような、子どもの感覚面の偏りを意識した遊びの組み立てが必要といえる。保育の中でも、例えば、外で遊ぶ場合なども、グラウンドを走り回るのがいいのか、斜面を転がるのがいいのか、元気に飛び跳ねるのがいいのかなど、子どもが楽しめる遊びとはどのような遊びなのかを、子どもが体験している感覚を想像しながら行っていくことが大切である。加えて、ごっこ遊びを通して、お友達を意識するとか、順番を待つとか、社会性を育てていくのだが、その中に、子どもの苦手とする感覚をさりげなく織り込むのも重要である。高橋¹¹⁾は、児童発達支援事業における作業療法士の役割として、作業療法士の視点（評価）を伝え、誰でも専門的かつ質の高いアプローチができるようにアドバイスをすることと紹介している。

こうした遊びの体験の中で A 児に変化が表れてくると、母親にも変化が現れてくる。母親の子育て

意識の変化には、児童発達支援事業特有の「ゆるさのある療育」という環境が影響していた。ゆるさのある療育は、ゆとりを持って子育てに取り組むことができる一つの方法だと考える事ができる。ゆるさのある療育とは、子どもを単に甘やかすのではなく、子どものありのままを受け入れながら、そして、親子で楽しみながら行う療育スタイルである。母親が、子育ての困難さで悩んでいる時期には、まず、子育てを楽しいと感じてもらうことが必要である。A児の母親は、子どもが変化して行く姿を見て、できることが増えていくのを実感し、悩みを相談できるピアとの交流が、楽しく子育てをする力となっていた。そして、子どもの障害受容につながっていったといえる。児童発達支援事業の療育スタイルの一つの姿として、母親が余裕をもって子育てできる、ゆるさのある療育スタイルも必要と思われる。

A児の母親にとって、児童発達支援事業での体験は、大きな転機になっていた。早期療育施設として位置付けられている児童発達支援事業は、診断が確定していなくてもサービスを利用できる施設である。サービスを受けるには、障害児通所給付申請を行い、通所受給者証の給付を受け、事業所と利用契約を締結して、児童発達支援事業の利用が始まる。療育手帳等を持っていなくても、支援の必要性に関する意見書があれば利用申請ができる。「障害ではないか」と葛藤している家族にとって、医療機関などで診断を受けることは容易なことではない。診断がついていなくても利用できる児童発達支援事業は、早期から療育を開始できる可能性を増やす。

今回は1事例の検討であったが、今後、更に事例を増やして、児童発達支援事業における作業療法士の役割について検討を重ねていきたい。

5. 謝辞

本論文をまとめるにあたりご協力いただきましたご家族の皆様、並びに、ご指導いただきました熊本学園大学大学院 伊藤良高教授、熊本保健科学大学 佐川佳南枝准教授に深く感謝申し上げます。

本研究における利益相反は存在しない。また、本論文は、九州理学療法士作業療法士合同学会2014にて発表したものを加筆、修正したものである。

注1：発達障害とは、広汎性発達障害（自閉症、アスペルガー症候群等）、学習障害、注意欠陥・多動性障害等の通常低年齢で出現する脳機能の障害（発達障害者支援法第2条より）

注2：全国発達支援通園事業連絡協議会会長の近藤直子は、児童発達支援事業での療育を、「発達支援」「家族支援」「地域支援」の総合的な取り組みだと考え、発達支援の取り組みの主役は、子どもと保育士であるとしている¹²⁾。

注3：自閉症スペクトラム症（Autistic Spectrum Disorders 略称 ASD）。精神障害との診断と統計マニュアル第5版（DSM-5）によると、「社会性コミュニケーションの障害」、「限定した興味と反復行動」を特徴とする発達障害である。

注4：感覚統合療法とは、アメリカの作業療法士であるエアーズ（Ayres）により研究された感覚統合理論（Sensory Integration Theory）に基づいた実践方法で、行動面などに問題を持つ発達障害児の治療、援助を立案する上で様々な療育場面で応用されている¹³⁾。SIと略して呼ばれることが多い。

6. 引用文献

- 1) 「平成26年度 熊本市子ども発達支援センター事業実績」熊本市子ども発達支援センター業務概要資料、平成27年5月26日付
- 2) 「年齢に応じた重層的な支援体制イメージ」障害保健福祉関係主観課長会議資料（児童関係）、平成23年10月31日付
- 3) 中村尚子：障害児福祉における児童デイサービスの役割. 立正社会福祉研究, 第8巻1号, 1-9.2006.
- 4) 川池智子：「子育て・子育て支援」をめぐる保育行政の課題（その3）－障害児等、特別な配慮を必要とする子どもと親の支援－. 山梨県立大学人間福祉学部紀要1, 43-64, 2006.
- 5) 田代明里, 蔵原里沙：ASD（自閉症スペクトラム）の児を持つ母親の子育てと作業療法の経験に関する質的研究－ライフストーリー分析から作業療法支援を考える－. 平成25年度熊本保健科学大学保健科学部リハビリテーション学科卒業論文集 第4巻, 198-205. 2014.
- 6) 宮脇克実, 上岡義典, 椎野広久：療育をうけて

- いる子どもの母親意識の変化—児童デイサービスを利用している母親の振り返りから—. 徳島大学総合科学部 人間科学研究 第20巻, 49-57, 2012.
- 7) 桜井厚: 現代社会学ライブラリー7 ライフストーリー論. 弘文堂, 6, 65, 2014.
- 8) 桜井厚, 小林多寿子編著: ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門. せりか書房, 31-36, 2005.
- 9) 小西紀一: 対象操作機能と適応反応. 感覚統合研究10, 17-24, 2004.
- 10) 加藤寿宏: コミュニケーションの発達—広汎性発達障害児と共に遊びを楽しむために—. 感覚統合研究10, 1-8, 2004.
- 11) 高橋謙: 児童発達支援事業・放課後等児童デイサービス事業における作業療法士の役割と実践. 臨床作業療法 Vol.12 No.4, 310-313, 2015.
- 12) 近藤直子, 全国発達支援通園事業連絡協議会編著: ていねいな子育てと保育 児童発達支援事業の療育. クリエイツかもがわ10-16, 191, 2013.
- 13) 福田恵美子編: 標準作業療法学 専門分野 発達過程作業療法学. 医学書院, 41, 2006.
- (平成28年3月3日受理)

Child care support for mother of the autistic children
in Day service center of childhood
and role of the occupational therapist
– Through life story interviews of a mother of autistic child –

Seiji MORIMOTO

The purpose of this study was to investigate desirable nursing and support methods in a childhood day service center, and the role of occupational therapists as expert staff members. Life story interviews were conducted with a mother of an autistic child and data were analyzed while referring to the occupational therapy records. It was confirmed that “sensory integration therapy” through play was effective in relieving hypersensitivity, and helped the child to relax and show interest in others. It was also confirmed that the mother found “loose frame” nursing in the day service center as being effective for reducing childcare stress and promoting motivation.

Key words: Childhood day service center, childcare support, play, role of occupational therapist